よみがえったマングローブ林

―ミャンマー・ウトゥ村の5年間の記録―

Participatory Restoration of Mangrove Forests: 5-year Activity of U To Village, Myanmar

RCJ

ラムサールセンター

協力 ミャンマー森林協会

この印刷物は、トヨタ自動車株式会社の「トヨタ環境活動助成プログラム」の助成を受けて作成しました。

はじめに

「ミャンマーの南東部にある小さな漁村が、マングローブ林の減少で魚が捕れなくなって困っている。昔のように豊かなマングローブ林を復活させる活動に協力してもらえないだろうか」

ヤンゴンに拠点を置くNGO「ミャンマー森林協会（MFA）」のトゥンパオさんからラムサールセンター（RCJ）がこんな相談を受けたのは2016年春でした。ミャンマー南部のエーヤワディ（イラワジ）地域ウトゥ川河口にあるウトゥ村（人口500人）の話だといいます。

熱帯や亜熱帯の汽水域に発達するマングローブ林は、魚、エビ、カニ、貝などの重要な生息環境であるばかりか、良質な材木や薪炭材の供給源であり、水質浄化や、高潮や津波から国土を守るなどいろいろな役割を果たしています。ミャンマー政府はマングローブ林の無秩序な伐採を禁じていますが、ウトゥ川流域のマングローブ林では、他村の人がやってきて伐採していくなど荒廃がすすみ、魚やカニの漁獲が減少、漁業で生計を立てている村人の生活が困窮しました。

村人から相談を受け、「村人自身の手でマングローブ林を再生し、豊かな漁場をとりもどす活動にMFAとして協力したい」とトゥンパオさん。MFAはミャンマーの国立公園の元レンジャーなどで構成されているNGOで、マングローブ林はじめ熱帯、亜熱帯地方の森林管理についての豊富な経験を基礎に、事業を具体化する活動資金を探していました。

この話を聞いてRCJはMFAをパートナーに、NGO活動を支援する「トヨタ環境活動助成プログラム」に助成金の申請をすることを決めました。幸い2016年に申請した「ミャンマー国ウトゥ村での住民参加の持続可能なマングローブ生活林づくり」（活動期間2017－18年）と、2019年に申請した「ミャンマー国ウトゥ村の“マングローブ”再生および周辺村への展開と環境普及啓発」（2020－21年）の2つの事業に対して助成を受けることができ、ウトゥ村の人々と協力して足掛け5年にわたって再生活動に取り組んできました。

いま、ウトゥ川の流域には、豊かなマングローブ林が回復しつつあり、貝やカニ、魚の姿も戻ってきています。

ウトゥ村はどのようにしてマングローブ林と豊かな生態系をとりもどしたのでしょうか。これはその5年間の記録です。

マングローブ林を取り戻したいコミュニティと出会った

RCJの一行がはじめてウトゥ村を訪ねたのは2017年１月でした。メンバーはプロジェクトリーダーの亀山保さん以下中村玲子さん、前川公彦さん、ビシュヌ・バンダリさん（ネパール）の4人。MFAのトゥンパオさん、ミョールウィンさんとともに、ヤンゴンを朝８時に出発し、西へ向かって約6時間、エーヤワディ地域のデルタ地帯を横断し、ベンガル湾に面したラカイン海岸に向かってひたすら車を走らせました。途中、エーヤワディ地域の首都パテインで、ミャンマー政府林業局エーヤワディ支所のティンマウンタン所長を表敬訪問、ウトゥ村での活動開始について報告し、協力をお願いしました。

ウトゥ村に着いたのは午後3時すぎ。村の中心にあるコミュニティセンターで、村長さんはじめ村の人々と初めて顔をあわせました。

ウトゥ村の周辺には豊かなマングローブ林が広がっているように私たちの目には見えました。でも村の人たちの話を聞くと、1990年ころまでは密度の濃いマングローブ林が広がっていたが、その後、燃料確保や炭生産などのために伐採され、年々荒廃が進んでいるといいます。

「以前は川に網を入れるとすぐ捕れた魚が捕れなくなった」「カニも少なくなり、体が小さくなった」「海水が川の奥まで流れ込んで井戸に入り、水が飲めなくなった」といった話を口々に聞きました。

村の人々は、２年ほど前から、以前には採集して売っていたマングローブの種子を売らないようにし、自前の育苗施設で苗を育てはじめた人もいます。しかしウトゥ村周辺のマングローブ林は保護林の指定を受けていないため、伐採の禁止はできません。電気やガスがきていないウトゥ村やその周辺では、マングローブは毎日の煮炊きにも欠かせないエネルギー源でもあるのです。

「なんとかしてマングローブ林を取り戻したい」「ウトゥ村のマングローブを保護林にしてほしい」などの声が参加した人からはあがりました。

集会の後、周辺のマングローブ林を見に行きました。船で川をさかのぼり、支流に入っていくと、伐採された木の切り株だけが残る空き地があちこちにありました。「昔はここもマングローブに覆われていたのだが」と村の人。一見豊かに見えましたが、村のマングローブ林は実はすき間だらけの劣化した森林でした。

2017年1月ウトゥ村の人たちとのはじめてのミーティング

昔はここもマングローブ林だったという村の東側のあき地

若い漁師がその日に捕れた魚を並べて見せてくれた

ウトゥ村とは

ウトゥ村（北緯16.9度、東経94.4度）はミャンマー西部、ベンガル湾岸のラカイン海岸地域にある新開拓村の一つです。ベンガル湾に流れ込むチャウンター川の支流ウトゥ川（全長24km）の河口に1980年に４軒の入植者が住み始めたのがはじまりといわれています。村の名前は、傍らのウトゥ川から名付けられました。

海からの海水と川からの淡水が入り混じる河口の汽水域は、海と川の両方の魚を捕ることができる豊かな漁場です。エーヤワディ地域の首都パテインに通じる国道沿いという交通の便もあり、漁業で生計を立てる入植者は次第に増え、いまでは500人120世帯が暮らしています。村には村長さん、男女ひとりずつのリーダー、数名の長老、そして10世帯長（10世帯ごとのグループ長）がいて、毎月1日にコミュニティ会議を開き、いろいろなことを決めていきます。小学校が１つあり、130人の子どもが通っています。

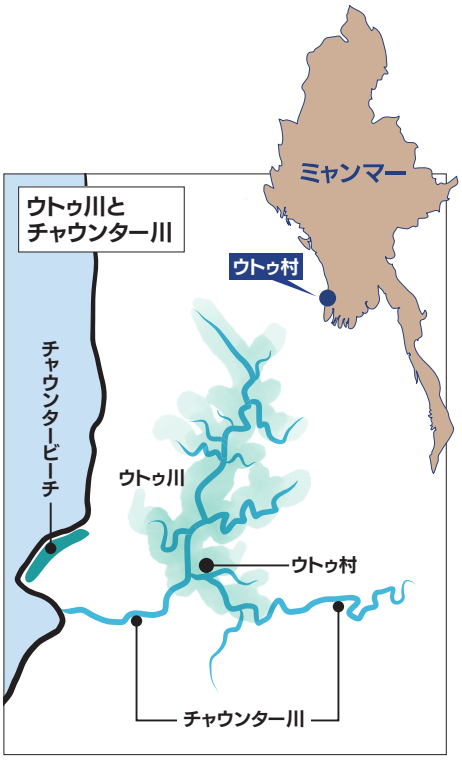
ウトゥ村からほど近いベンガル湾に面したラカイン海岸には、砂浜の広がるチャウンタービーチがあり、1992年以降、観光リゾートとして開発が進みました。パテインとチャウンタービーチをつなぐ道路は整備され、ホテルが立ち並びました。ミャンマー各地からの旅行者でにぎわうチャウンタービーチは、ウトゥ村で捕れる魚やカニ、貝などの重要な消費地となっています。

2016年には現在の新しい橋が完成し、チャウンタービーチまで車で10分ほどでいけるようになりました。チャウンタービーチの観光客を対象に、ウトゥ村の豊かなマングローブ林と生物多様性を活用したエコツーリズムの開発にも期待が寄せられています。

村のメインストリート。ウトゥ川沿いに高床式の家が並ぶ

小学校の入口前の道路は
チャウンタービーチへつながっている

オフシーズンのチャウンタービーチ。
観光客を乗せた馬がのんびり砂浜を歩いていた



ミャンマーとその自然

ミャンマー連邦共和国（旧ビルマ）は、東南アジアのインドシナ半島の西側に位置し、面積68万㎢（日本の1.8倍）の国土を持つ南北に長い国です。北西の国境をバングラデシュとインド、北東を中国、南東をラオスとタイと分け合い、西南はインド洋のベンガル湾とアンダマン海に面しています。人口5500万人の70％がビルマ族で、その他シャン族、カレン族、ラカイン族、モン族など135の民族からなる多民族国家です。

国土の50％近くを森林が占め、北部高地から南に向かってエーヤワディ川、サルウィン川、チンドウィン川、シッタン川の4大河川が国土を貫いて流れています。なかでもヒマラヤを源流とする国際河川のエーヤワディ川（全長2200km）は幾筋にも枝分かれして流域に広大なデルタを形成、河口域には大規模なマングローブ林が発達しました。

西部の丘陵地帯から流れ出し、ベンガル湾に注ぐチャウンター川やウトゥ川の河口域にも肥沃な泥干潟が広がり、一帯にはマングローブ林が発達しています。

インドシナ半島の他の国にくらべて経済開発が遅れたこともあって、生物多様性豊かな手つかずの自然が残り、絶滅の危機にある水鳥の生息地が確認されたり、新種のサルが見つかったり、アジア最後の秘境ともいわれています。しかし、近年の急速な経済発展の影で、この生物多様性ホットスポットにもさまざまな影響が及ぶ可能性が懸念されています。

村の人々の活動がはじまった

2017年2月、ウトゥ村の人々によるマングローブ林復活への活動が始まりました。まず、活動を推進する中核として、村の長老代表、リーダー役など6人から成る「村づくりグループ(VDG)」を組織しました。村の全世帯を対象に社会経済基礎調査をおこない、事業活動の対象地の基本的な状況を把握しました。

6月までには、村の東にあるおよそ1㎢の空き地にマングローブの苗木を育てる育苗施設(苗床)を整備することを決定し、障害物をとり除いて整地し、周囲に土手や囲いを設置。一年物の苗木5000本を購入して苗床に移植しました。同時に周辺のマングローブ林から収穫してきた16,000本の実生の苗木も、一本ごとにポットに植え替え、手厚く世話をしながら育てることにしました。

さらに育苗施設の周囲には木道と手すりを整備し、夏の暑い日差しを避けるあずまやを築くことにしました。

並行して、村の周辺およそ200haのマングローブ林を、自主的な保全エリアと決定。それを周知し、マングローブの保全をよびかける看板を設置しました。

7月には普及啓発のデモンストレーションとして植樹祭を催し、参加者80人にはロゴ入りのTシャツ、蒸したもち米、野菜の天ぷらが配られました。

2017年の1年、ウトゥ村ではおよそ5000本のマングローブが植えられました。

2018年に入っても活動は継続されました。1月に3000本の若木を新たに購入し、育苗施設で苗を育てはじめました。並行して周辺のマングローブ林から実生を収穫して育てる活動も継続しました。また保全エリアで下生えの低木や雑草類を刈取り、昨年から育てていた、実生の苗木500本を植林しました。

5〜6月、雨季がはじまってから、購入した若木と、実生から育てた苗木を、植林計画地に植えていきました。1万本の若木を植林。実生の苗木9600本をマングローブ林が劣化してできた隙間に補植していきました。

2017年に植林した苗木の90%が無事に育っていることも確認されました。そして2017年〜2018年の2年間に、合計5haに2万本以上の若木の植林と7万本の実生の苗木の補植をおこなうことができました。

2018年11月には、エーヤワディ地域を訪問するミャンマー政府自然資源・環境保全省(MONREC)オウンウィン大臣の視察も実現しました。大臣の視察はウトゥ村の人たちを元気づけました。

6フィート間隔の竹の支柱にフタバナヒルギの苗木を植林する

青看板は保全エリアを示し、赤看板には「マングローブの保全にご協力ください」の文字

村の育苗施設で大切に育てられている苗木の列

2度目の現地訪問

最大の植林地ナチェカンで訪問メンバーの記念撮影

ナチェカンへの泥干潟を歩く訪問メンバー

2018年10月、RCJメンバーはふたたびウトゥ村を訪れました。前回も訪れた亀山保さん、中村玲子さん、ビシュヌ・バンダリさんに加えて、林聡彦さん、岩崎慎平さん、佐藤湧馬さん、サンサニー・チョーウさん(タイ)の7人です。今回もMFAのミョールウィンさんが案内役兼通訳として同行してくれました。

1年半ぶりに訪ねたウトゥ村にはいくつかの変化がありました。ひとつは村の人々の手で苗を育て植林したマングローブがよく育ち、裸地化した空き地が目に見えて少なくなったことです。また日本の企業の支援でジェネレーターが設置され、夕方6時から村に電気がつくようになっていました。さらにはあるお坊さんの寄付で深井戸が掘られ、塩害に苦しめられていた人々の飲み水問題が解決しました。

2017年の訪問時には空き地になっていた場所には育苗施設と、そこへつながる木道とあずまやができていました。村を見下ろす位置にある自動車道路とあずまやは木の階段でつながれ、村を訪れる観光客が気軽に散策できるように工夫されています。将来のエコツーリズム開発を見通しての設計です。

翌日は、MFAの現地スタッフ、ソーミントさんの案内で、船に乗ってウトゥ川をさかのぼり、マングローブの植林地に向かいました。1時間ほどで最大の植林地ナチェカンに到着、船を降りて、長靴がずぶずぶと泥に沈む干潟の上をおぼつかない足取りで泥んこウォーキングし、ゴミなどを取り除いて整地した空き地で、昨年植林した苗がすくすく育っているのを確認しました。この日はほかに5か所の植林地を見学し、記念の植樹もおこないました。

マングローブとウトゥ村

マングローブとは、熱帯・亜熱帯地方の沿岸域の河口など、海水と淡水が混じり合う汽水域に生える常緑の樹木の総称です。日本でも鹿児島県南部や沖縄県の沿岸部に分布しています。

マングローブを構成する植物は50〜70種くらいあるといわれ、密に生えて樹林帯を構成することが多いのでマングローブ林ともいわれます。陸の植物はふつう塩分を含む海水に漬かると枯れてしまいますが、マングローブ植物は潮の満ち引きの影響を受ける潮間帯の汽水域でだけ育ち、1日のうち何時間かは海に沈んでも生きられるという、特異な性質をもっています。

やわらかい泥干潟のうえに生えるので、倒れないようにタコ足状に根をはる支柱根や、水面から顔を出して呼吸するための気根（呼吸根）を発達させたり、葉の裏から塩分を排出する仕組みを備えていたり、独特の性質をもっています。

世界のマングローブ林の総面積は約1500万haといわれます。地球の森林総面積のおよそ0.4％にすぎませんが、さまざまな理由によって年々大きく減少しています。

胎生種子（実）がたくさんぶらさがるオオバヒルギの木

たこ足状の支柱根でしっかりと立つオオバヒルギ

密度が濃くなり背も高くなったウトゥ村周辺のマングローブ林

たとえば東南アジアのマングローブ林の多くは、エビの養殖場に姿を変えました。火力が強く長持ちする良質の炭の材料として伐採され、また水田に開発されたマングローブ林も少なくありません。

ミャンマーはアジアで4番目にマングローブが多いといわれる国ですが、近年、林産物の開発や農地への転換などによって減少しています。特にデルタ地帯のエーヤワディ地域では、都市部の燃料用木材として伐採されていて、劣化が進んでいるといわれます。

しかし、海と陸との境目に発達するマングローブ林には、さまざまなかけがえのない機能があります。エビやカニ、貝などの底生動物の生息地、魚の産卵や幼魚の育成場所であり、高潮や高波、津波などから陸地を守り、陸からの富栄養化した排水を浄化する働きもあります。気候変動の大きな要因となっているCO_2の吸収源としての働きも見逃せません。

いま残っているマングローブ林を保全するだけでなく、劣化し消滅したマングローブ林を回復・再生する活動が求められています。

ウトゥ村で多く見られるマングローブ植物は、オオバヒルギ、フタバナヒルギ、デカンドラコヒルギ、オヒルギ、メヒルギ、ホウガンヒルギ、マルバヒルギダマシなどです。当初は12種類のマングローブがあるといわれていましたが、2020年

採取したオヒルギの胎生種子をポットで育てる

10月、パテイン郡森林部の野外調査によって、純マングローブ22種、準マングローブ6種と認定されました。なかにはIUCNのレッドデータブックで「稀少種」や「絶滅危惧種」とされている種もあることがわかりました。ウトゥ村には、まだまだ貴重なマングローブ林が残されていることがわかりました。

ウトゥ村に多く見られるヒルギ系のマングローブは、胎生種子といって種子が木に成っているときから発芽し成熟をはじめます。十分に成熟すると親木から離れて落下。とがった先端で足元の泥に突きささり、すぐに根付いて葉をのばしていく特殊な性質を持っています。

村人たちは採取した胎生種子をそのまま植えたり、ポットに植え替えて育苗施設で手厚く育てて、それを植林したりしています。

マングローブの恵み、マッドクラブ

ウトゥ村のマングローブの泥干潟でとれるマッドクラブ

カニのふ化施設が海上にあるバンサカウ村（タイ）での研修

抱卵の母カニの卵をブラシでこすりとる作業を体験

ウトゥ村の漁業の主な収入源の１つは、マングローブの泥干潟に生息するマッドクラブ（ノコギリガザミ）漁です。マッドクラブはマングローブ林の外縁や森の中、泥の中、そして産卵時には水中を沖へ移動するなど、成長ともに生息場所は変わりますが、マングローブ林とは切り離せない関係にあります。

しかし、近年のマングローブ林の劣化とともに、カニが小型化し、数も捕れなくなってきました。

そこで2017年5月、専門家をよんで「カニ肥育」の研修をおこないました。カニ肥育とは、捕れた小さなカニをしばらく生け簀で育てて大きくしてから市場に出すやり方です。より高価格で売って収入を得ると同時に、天然のカニ資源への圧力を減少することでカニ保護にもつながります。

研修には村人12人が参加。さっそく、研修で教わったとおり平鍋型の池を作り、小さいカニ400匹をこの池に入れて、エサやりを開始しました。

12月には、カニの育成型漁業活動が盛んな隣国タイに「カニ研修」にも出かけました。村人代表のティンティンミャーさんとゾーリントゥンさん、MFAからミュールウィンさんとソーミントさん、RCJからは亀山保さん、前川公彦さん、D.P.ダスさん（インド）の合計７人が参加。タイのマヒドン大学サンサニー・チョーウさんほかのコーディネートで、タイで盛んにおこなわれている「クラブバンク」や、「ソフトシェルクラブ養殖」の現場を見学しました。

バンサカウ村のサティーフ村長と参加者一同

クラブバンクとは、減少するカニ資源をコミュニティベースで回復させる資源管理の手法です。抱卵中のメスのカニを保護してその卵を採取し、ふ化させた幼生を海に放して、自然環境の中で稚カニを増やす試みです。

この国際研修は、ウトゥ村の将来の持続可能性を考えるのに大きな刺激になりました。

ところがその後、ウトゥ村のカニ肥育の試みは、池に放したカニが全部いなくなってしまうというアクシデントで頓挫してしまいました。タイで研修したクラブバンクやソフトシェルクラブ養殖は、ウトゥ村ではじめるにはいくつかの課題もあり、具現化するまでには時間がかかりそうです。

マングローブ貝の養殖もはじまった

ウトゥ村の人たちは、周辺で獲れるマングローブ貝にも着目しました。マングローブ林の泥干潟のなか3〜6cmくらいの深さに潜って生息している貝で、ウトゥ川には数種類のマングローブ貝が生息しています。かき出した泥の中から数百個が採れることもあり、おいしいので高く売れます。村人たちはこのマングローブ貝も肥育して大きく育て、より高く販売しようと試みました。

2017年10月、村のマングローブの育苗施設の近くに囲いをつくり、マングローブ貝の肥育を始めました。といってもエサやりなどは不要です。満潮時にウトゥ川をさかのぼってくる海水のなかにふくまれるプランクトンが天然のエサとなって貝を育てます。自然循環型の肥育方法です。

翌2018年には、村の数軒の家が、自分の家の床下を利用して、マングローブ貝の肥育を始めました。川岸に沿って集落が発達し、満潮時には潮の流れが足元を洗う、高床式の住まいが立ち並ぶウトゥ村ならではの飼育施設です。家のすぐそばで育てるので、盗難防止にもなるという話でした。

マングローブ貝の種類とサイズを比べて見せてくれた

家の床下で肥育中の貝を村の人が案内してくれた

エコツーリズムへの期待

村の豊かな生物多様性を活用したエコツーリズムについても検討が進められました。ウトゥ村はミャンマーのラカイン海岸有数のリゾート地チャウンタービーチに近接しているので、リゾートへの観光客を対象にしたウトゥ川のマングローブ・クルーズ開発などの可能性は大きいと思われました。

2018年10月に、専門家をよんで第1回目のエコツアー研修を実施、20人が参加しました。マングローブ育苗施設を周遊する木道や休息用のあずまやは、将来のエコツアー開始の可能性を視野に入れた専門家の助言から設置されました。

2020－21年の第2期活動では、ヤンゴン近郊の住民参加型エコツーリズム先進地チャッタレイ村の事例を見学するためウトゥ村から視察団を送ることも計画されました。この計画は、新型コロナ感染症の流行によって実行できなくなりましたが、2020年6月初旬、MFAのメンバー2人が代表してヤンゴン近郊のチャッタレイ村を訪れました。そして、その調査結果を携えて専門家とともにウトゥ村を訪問し、研修ワークショップを開催して村の人々と成果を共有しました。この研修には26人が参加しました。

高台の道路から見える遊歩道、あずまや、育苗施設

村ではその後、将来のエコツアー訪問者用のトイレと汚水浄化槽建設工事をおこないました。

2021年6月トイレと汚水浄化槽の基礎工事をおこなった

こんなボートでエコツーリズムを始めたい

村でただ一つの野菜と雑貨のお店

コミュニティ・フォレストリーをめざして

マングローブの育苗、植林活動は、2020年2021年と村の人々の手で継続されています。若木と実生の苗木をあわせ、これまでに12万本をこえるマングローブが植林されました。こうした活動で再生、回復された豊かなマングローブ林のおかげで、ウトゥ川には少しずつ魚たちが戻ってきました。カニや他の底生動物の捕れる量も増え、ウトゥ村の漁業は活気を取り戻しつつあります。

ウトゥ村の活動の成功をみて、少し南のラカイン海岸沿いにあるタジン村でも、住民によるマングローブ再生活動をはじめたいという声があがりました。ウトゥ村の保全再生体験を伝え、まずは5haに1万5000本のマングローブ植林をすることになりました。

もうひとつの大きなできごとは、ウトゥ川流域のマングローブ林650haのコミュニティ・フォレストリー認定に向けての動きです。ウトゥ川のマングローブ林は保護林の指定を受けていないので、ウトゥ村の人たちがどれほど保全の大切さを訴えたとしても、伐採や水田への転換などを法的に規制することはできません。

それならば地元住民が森林の管理、保全、利用に責任をもつコミュニティ・フォレストリーへの認定をめざしたら、とアドバイスしたのはMFAでした。

コミュニティ・フォレストリーは、森林の管理を地域住民がおこない、そこで得られる利益などを住民に分配するという住民参加型の森林資源管理法のひとつです。社会林業（ソーシャルフォレストリー）ともいわれます。

ネパールで1970年代半ばに導入され、フィリピン、インド、タイ、中国などにも広がりましたが、ミャンマーに導入されたのは1990年代半ばのことでした。

制度が成立するためには、日常的に森林に生計を依存するコミュニティと住民がいて、森の特性を熟知していること、そして今後も率先して持続的に利用するであろうことが前提となります。

森林資源管理の長い歴史をもつミャンマーで、住民参加型の森林管理はかなりユニークな新しい考え方です。

2010年の段階で、ミャンマーのコミュニティ・フォレストリーの面積は森林全体では0.1％程度です。まだまだ限られた面積だけが認定されていて、狭き門となっています。

ウトゥ村はMFAの助言に沿って、森林利用者グループを作り、周辺650haの土地に対する管理計画作成の準備を進めることになりました。

その後の知らせでは、コミュニティ・フォレストリー認定の前提となる「公的保護林」指定の手続きを政府林業局エーヤワディ支所に申請したということです。

ウトゥ村のマングローブ林は、コミュニティ・フォレストリー認定に向けて少し近づきました。

これからのウトゥ村―自然環境のゲートキーパーとして

ウトゥ村の人々のマングローブ林再生と持続可能な暮らしの実現への取り組みは、2019年末から世界中を席巻した新型コロナウイルスのせいで、活動の停滞を余儀なくされました。RCJメンバーのミャンマー訪問はもちろん、厳しい行動制限で、ヤンゴンのMFAのスタッフが自由に現地に行くこともできませんでした。観光地チャウンタービーチの旅行者も減り、ウトゥ村で捕れたカニやマングローブ貝の売れ行きもはかばかしくありません。

それでも村の人たちは、できる限りの知恵と力をしぼってマングローブの育苗、植林、壊れた木道の補修などを続けています。育てた苗の一部は、これから新しくマングローブ再生活動に乗りだそうとしている近隣のタジン村に提供することも決まっています。

コミュニティ・フォレストリー認定へ向けての政府との調整も進んでいます。まだ時間がかかるかもしれませんが、ウトゥ川河口から上流にかけての豊かなマングロー林の管理と保全の責任がウトゥ村の人々の手に委ねられる日がきっと来ることを信じています。

ウトゥ村はウトゥ川の河口に位置し、そこから上流へおよそ24kmの川の流域に、ほかに村はありません。上流部の森林地帯には200頭のアジアゾウはじめ多様な生きものが生息しています。ウトゥ村とそこに暮らす人々は、ウトゥ川の豊かなマングローブと自然環境を守るゲートキーパー(門番)として、かけがえのない重要な役割を負っているといえます。

いま地球環境は深刻さを増しています。コロナ禍や社会変動などをのりこえて、子どもたちや孫たちにどんな形の自然環境を手渡すことができるか、が私たちに問われています。

もう一度ミャンマーを訪ね、MFAの人といっしょにウトゥ村へ行って村の人々と再会し、ふたたび協力して活動の次のステップに踏み出せる日を楽しみに待っていようと思います。

よみがえったマングローブ林ーミャンマー・ウトゥ村の５年間の記録
2022年３月31日発行 ©2022年ラムサールセンター(RCJ)

発行:ラムサールセンター
〒153-0063　東京都目黒区目黒2-3-1-101(メープルツアーズ内)
Tel/Fax: 03-3792-5513　E-mail: ramsarcj.nakamura@nifty.com　ホームページ:http://ramsar-cj.site/

協力:ミャンマー森林協会
編集・執筆:亀山保、中村玲子、北本健人
デザイン:安部彩野デザイン事務所
写真協力:ミャンマー森林協会、亀山保、中村玲子
印刷:株式会社藤和